

頭に剣山が刺さった男

その男・葛西純(36歳)の頭には剣山が刺さっていた。数分前、頭に剣山をあてがわれ、思い切りパイプ椅子でぶっ叩かれたのだ。当たり前だが、剣山は花を生けるときに使うもので、頭に刺すものではない。ところがデスマッチのリングでは、危険度高の凶器としてしばしば使われているのだ。

「竹田、オラ！」
「来い、葛西！」

葛西と対戦相手・竹田誠志の激しいエルボー(肘打ち)合戦が繰り広げられる。2人とも全身血まみれだ。蛍光灯を武器に殴りあったり、破片の上でバックドロップなどの応酬を繰り広げたりしたため、全身がスタスタに切り刻まれているのだ。「葛西ー」「竹田ー」「クレイジーモンキーー」「葛西、デスマッチを教えてやれー」「竹田、遠慮するなー！」

時刻は午後8時50分。試合はこの日のプロレス興行のメインイベントだ。ぎっしりと埋まった後楽園ホールの観客席では、熱狂するファンの声援があちこちで飛び交っている。一方で、よく分からぬまま彼氏や友人に連れて来られたのだろう、口を半開きにして絶句している観客の姿もちらほら。「この人達、何してんの？」とドン引きしているのが見て取れる。

額の傷が、何よりも雄弁にそれを物語っている。

これまでに剣山、蛍光灯、ガラス、カミノリ、画びょう、有刺鉄線、サポテン、炎など、考えられる限りの凶器を使ったデスマッチを体験してきた葛西。エピソードを聞くと話は尽きない。

「蛍光灯はスパツ、ガラスはガリガリという感じで皮膚が切れるんです。試合後にシャワーを浴びていると、体の中に入った蛍光灯の破片が傷口から出てくることありますね」

「ケガをしても基本的に縫合はしませんが、どうせまた試合で開いちゃうんで、筋繊維とか骨が見えたり、脂肪が飛び出したんじゃない限りは」

「剣山が頭に刺さったときは、痛みがバーン！ って体を突き抜けてケツの穴から出ていくような感覚です。試合が終わった後は、でっかいベンチで2人がかりで引っぱってもらうんですが、頭皮がめくれるんじゃないかっていうくらい痛いんですよ」

「リングに3万個の画びょうをまいて、裸足で試合したときはすごかったです。足の裏は神経が密集しているからとてもじゃないけど我慢できない。翌日起きたら足の裏がパンパンに腫れて、1週間くらい熱が引かなかったです」



コエヌマカズユキ

KOENUMA Kazuyuki

「試合時間10分経過、10分経過」会場に試合経過のアナウンスが流れる。恐らく誰の耳にも届いていない。

痛みがケツから突き抜けた

「プチプチって針が刺さる音が聞こえるんですよ。耳じゃなくて、体の中で。それがたまらなく嫌でしたね」

今から約11年前、初めて行ったデスマッチのことを葛西はよく覚えていた。「有刺鉄線デスマッチといって、ロープにバラ線が張り巡らされているリングで行う試合だ。」

「デスマッチは見るのとやるのでは全然

そもそも僕が葛西のことを知ったのは、インターネットで偶然葛西の試合の映像を見たのがきっかけだった。デスマッチなものにときにコミカル。しかし山場では本当に死んでしまうのではと感じさせるほど、危険と痛みがヒシヒシ伝わってくる葛西の試合は、プロレスファンだがデスマッチには興味がなかった僕の心をもたちまち虜にした。

しかし、気になって仕方なかった。あまりにも危険やリスクが大きいデスマッチのリングを、葛西はなぜ主戦場に選んだのだろうか？

デスマッチファイター誕生まで

北海道・帯広出身の葛西が初めてプロ

レスを見たのは小学校1年生の頃。「帯広にプロレスが来る！ ジャイアント馬場っていう家の2階くらいの身長の人で試合をする」と同級生に教えられ、両親にねだってチケットを買ってもらった。従兄弟と会場に行き、初めて見るプロレスの迫力とスリルに興奮を覚える。場外乱闘も発生し、悪役外国人レスラーが、葛西少年が座っていた椅子に日本人レスラーをぶん投げた。慌てて逃げまどいながらも、葛西はすっかりプロレスの虜になっていた。

それからは遊ぶ間も惜しんでプロレスの本を読み漁り、将来はプロレスラーになりたいと思うようになった葛西少年。ところが高校生になると身長が172cmでストップした。当時はプロレスラー

違うなあって思いましたね。選手はこんなに痛いことよくやってるな……って思いました」

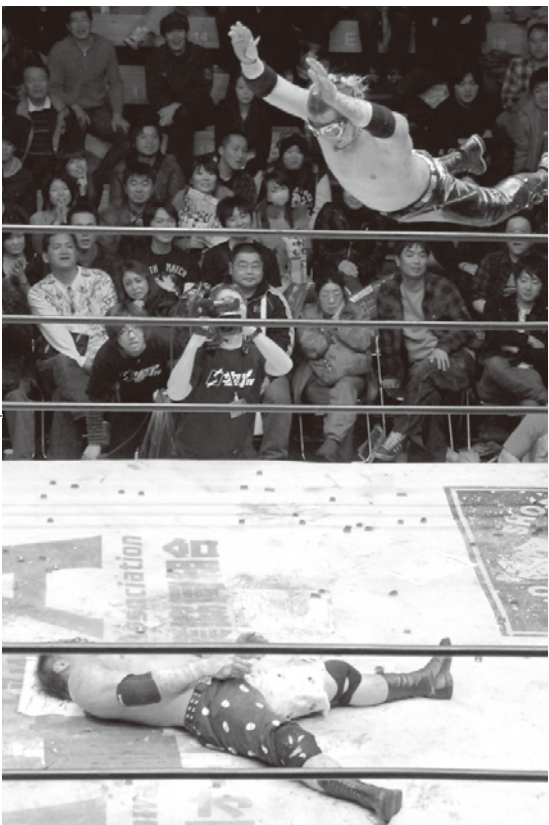
神奈川県内にある甘味処で、僕は葛西と向き合っていた。普段は血まみれで蛍光灯を振り回している男が、今日はカジュアルなパーカーとスウェットに身を包んであんみつを食べている。その表情は柔和で、口調もとても礼儀正しい。リング上とあまりにもかけ離れた姿に僕は少々戸惑っていたが、目の前にいるのは間違いなく「クレイジーモンキー」●

「立嶋選手はキック界初の年棒1000万円プレーヤーと言われているので、だったらキックボクサーになって俺は2000万円稼いでやろうって無謀にも考えていましたね。キックは階級性だし、身長もそこまで気にならないでしょうから」

とは言うものの、いきなりキックボクサーになるのはさすがに不可能。そこで高校卒業後、葛西は上京して警備会社に就職し、働きながらプロを目指そうと考える。ところが寮の近くにキックのジムがなかったことから、体作りのためにボディビルジムに通い始めた。この選択が葛西の運命を大きく動かした。

「当時は18〜19歳と若かったし、ちゃんとしたトレーナーもいたので、どんどん体がごつくなるわけです。ジムの会長にも『お前はキックボクサーの体じゃない、プロレスへ行ったらどうだ？』って言われて、考えが傾き始めました」

近所にあった元プロレスラーが経営する酒場に行っても、「すごい体していますね。入門テストだけでも受けた方がいいですよ」と熱心に勧められた。心は揺れ動くも、踏ん切りが付かず迷う葛西に決



定的な出来事が起こった。女っ気のない職場で働いていた葛西は、給料をもらおうとまず風俗に行くという生活を送っていた。濃厚なプレイを求めて、外国人にサービスを受けることもあったという。そんな中、雑誌で見かけた「H-I-V自己検診チェックリスト」を何気なく行ってみたところ、15項目中12〜13が当てはまった。葛西は顔面蒼白になりながら検査機関に向かった。

「検査結果が出るまでの2週間、感染していたらどうしようかとずっと考えていた。結果が出るまで本当に怖かった。そのときに思ったんです。もし生きていたらなら、自分が本当にしたいことをしようって」

結果は陰性。こうして葛西はプロレスラーになる決意をした。プロレスファンでありながら「今の技は利いていない」「今は当たっていない」と、試合を見ながら口出しをしていた父親を黙らせるため、あえて痛みが伝わる団体を志願。



トップデスマッチレスラー・伊東竜二とのその大一番を僕も観戦したが、大げさではなく「どちらかが死ぬ」と感じた。それほど危険で鬼気迫る闘いだっただけに、関わらず、終わった後には爽やかな感謝すら覚えるような試合だった。

完全に燃え尽きるまでデスマッチをやってみてほしいですね、と葛西は言う。「普段生活をしていて『生きてるな』って感じることはあまりないと思うんです。でもデスマッチにはそれがある。あれだけキツイことをやっていると、それだけって金額しかもらなくて、好きなことを目いっぱいやってお金ももらえていないってことは幸せですね」

いつか引退した後は、良い仕事を見つけて一軒家を買って、家族揃って田舎で暮らしたいと葛西は話してくれた。どんな仕事をしたのか聞いてみると、葛西は苦笑して言った。

「それが無いんです。次に仕事をするときは、生活するために働くことになるだろうから、それが苦痛っていうかね。一般の人からすれば当たり前のことなんですけど、今好きなことをして飯を食っている分キツイかなと思いますね」

約2時間のインタビュを終えて店を出た。葛西はキン肉マンのシールが貼られたヘルメットをかぶり、原付バイクにまたがる。これから家に帰り、夜はナイ

他団体に先駆けてデスマッチを行っていた大日本プロレスに入団したのだった。

フリーターのほうが稼いでいるんじゃない？

デスマッチは殺し合いって意味じゃないんです。葛西はそう言ってあんみつを食べる手を止めた。

「デスマッチは見てる人に死を連想させなきゃダメなんです。こんなの俺にもできるよ、とか思われたら終わり。『こんなことしたら死んじゃうよ!』と思われるような試合じゃないとデスマッチじゃないんです」

デスマッチ観を語り始めると、穏やかだったその口調が少し熱っぽくなっていく。ただし、と葛西は続ける。

「試合中に本当に死んじゃったらデスマッチじゃない。死ぬかもしれない状況をたっぶり見せておいて、そこから生きて帰ることが自分の仕事なんです」

確かに万が一死者が出たら、デスマッチはただのデスになってしまふ。興行である以上、生と死の境界線を綱渡りするような試合をしつつ、自分も対戦相手も生きて帰ることが必須だというのだ。

ところで気になるのは、デスマッチレスラーの収入である。現在はグッズの売り上げもあるため「そこそこ潤っている」

ト☆クリーニングに行くそうだ。

葛西はかつて後樂園ホールの2階バルコニー、約7メートルの高さから地上の相手に向かって飛んだことがある。そのときのことを振り返った言葉が頭から離れなかった。

「高い場所怖くないんですか? ってよく聞かれますが、怖いに決まってる。なのになぜ飛べるかって、それは『怖いと思う前に飛ぶ!』これに尽きます」

僕は結果を恐れるあまり、足がすくんで飛び出せなかったことが何度あるだろう? 遠ざかっていく稀代のデスマッチファイターの背中を見つめながら、一歩踏み出す勇氣こそが未来を作るのだと痛感した。

デスマッチレスラーの試合後

「20分経過、20分経過!」

血まみれの半裸の男たちが、蛍光灯の破片だらけのリングで殴り合っている。

それを満員の観客が大熱狂してあおっている。同じ時間、愛を語らう恋人や、故郷の母へ電話をかけている若者や、飲み屋で会社のグチをこぼしているサラリーマンなどが世の中にいる。だがこの瞬間、この会場においては全てがエキストラだ。

檻のてっぺんに上った葛西を追いかけ、竹田も檻をよじのぼって行く。葛西は先

という葛西だが、命と引き換えの報酬であるファイトマネーはどのくらいなのだろう?

「多いか少ないかって言ったら……すごく少ないですね。普通の人が聞いたら『えーっ、それだけしかもらってないの?』っていうような金額。ファイトマネーだけだったら、その辺のフリーターのほうが稼いでいるんじゃないですか」

僕はさほど驚かなかった。葛西はプロレスラーとして活躍する半面、副業でホテルの清掃のアルバイト通称・ナイト☆クリーニングを行っていることを、自身のブログで公言しているからだ。既婚者で子供もいる葛西は、一家の大黒柱。かつてケガで試合に出られない日々が続いたときに知人の紹介で始め、現在も続けているのだそう。プロレスではしばしばメーソンに登場して会場を熱狂させるトップレスラーの葛西。それでもバイトをしているという事実には、複雑な思いがこみ上げると同時に、まさに人生をかけてデスマッチに向き合っていることが伝わってくる。

引退……働けなくなったら誰が面倒を見てくれる?

2009年。東京スポーツが主催するプロレス大賞で、葛西は「ベストバウ

程のお返しとばかりに、剣山を竹田の頭に乘せてパイプ椅子を振りかぶる。パコン! とすさまじい音が響いてその頭に剣山が突き刺さり、竹田は檻から落下する。檻の頂点に立った葛西は、真珠湾で戦死したという祖父の形見のゴーグルをかけ、倒れている竹田に向かって飛んだ。フィニッシュホルドの「パールハーバー・スプラッシュ」だ。会場の歓声が全ての音をかき消した。スリーカウントが数えられ、「キ●ガイ」コールが響く中、葛西はマイクを取った。

「今この日本がどういう状況か知っているか? でもよ、こういう状況だからこそ俺たちが狂いあって、見に来てくれた客みんなを元気にすべきじゃねえか? けどこんなに素敵なお客さんたちに囲まれてデスマッチできてよ、元氣与えるどころか俺たちが元氣もらっちゃったみたいだな」

続いて葛西はこの日一番の大声を張り上げた。

「俺たちは絶対負けない。そして日本も絶対に負けな〜い!」

この日は2011年3月11日の東日本大震災以降、初めて行われたプロレス興行だった。

数分後、試合を終えたばかりの葛西が物販コーナーに現れた。一息つくことさえしていないのだから、汗と血にまみれ、



ト賞」を受賞した。これは年間で最も優れた試合に与えられる賞で、葛西のように小さな団体2009年よりFREEDOMSに所属に所属するレスラーが同賞を受賞するのは、ミニシアター作品がアカデミー賞を取るような快挙だった。実はこの直前まで、葛西は真剣に引退を考えていたのだという。

「両膝の状態が悪くて、試合の度に抜けていたんです。このままプロレスを続けて障がい者になったらシャレにならないし、もう止め時じゃないかなって正直思いました。ファンに話したら『止めないでくださいよ』って言うってくれたんですけど、働けなくなったら誰が面倒を見てくれます? 誰も見てくれなさいませんか」

だが、ベストバウトに輝いた試合で迷いが吹っ切れた葛西の中には、とことんプロレスを続けようという決意が生まれたいそう。袂を分かったかつての後輩で、

息を切らしたリング上のままの姿だ。

「お疲れ様でした!」マイク感動しましたよ!」マジ凄かったっす!」

たちまちファンが葛西の前に長い列を作る。サインだけでは飽き足りないのか、色紙に血を付けてくださいという女性ファンまでいる。嫌な顔一つせずファンに応じる間、葛西の体からは血が滴り続け、幾つもの雫となって足元に落ちていく。

やがて少しずつ客が引いていった。先程の大熱狂が嘘のように静まり返った会場で、葛西はようやく一息つくことができる。だがデスマッチレスラーの1日は終わらない。これからシャワーを浴び、試合道具が入ったキャリーケースを引き、満員電車に乗って帰るのだ。

葛西は控え室に向かって歩いていった。その頭には剣山が刺さったままだ。

